

<研究ノート>

# 留学生の人的ネットワーク形成と 大学での学びに関する事例研究

亀田 千里\*

## A Case Study on Human Network Formation and Learning of the International Students

KAMEDA Chisato\*

抄 録

近年、日本の大学に在籍する留学生が増加し、それに伴って大学卒業後に日本で就職する留学生の数も増加している。そして留学生を日本の社会にスムーズに送り出すことを目的とした、大学による指導の重要性も増している。本稿ではその指導のあり方を探るため、日本の大学に入学後着実に日本語力や専門性を伸ばして卒業し就職にまで至った、留学生の「成功事例」を分析した。その結果、「成功」している留学生は既存の状況からうまく人的ネットワークを構築することに長け、異文化に対する寛容さを有すること、そして自己マネジメント能力が高いことが明らかになった。

キーワード：留学生、人的ネットワークの形成、異文化受容、自己マネジメント能力、大学によるサポート

### 1. 研究の背景

近年、日本の大学に在籍する留学生の数は増加の一途を辿っている。日本学生支援機構の調査<sup>1)</sup>によれば、学部・短大・高等専門学校に所属する留学生の数は図1のように推移している。

2011年（H23）の震災の影響でH23年度からH26年度までは減少しているものの、その後は再び上昇していることが窺える。

大学だけの数値を見ると、平成28年5月

現在、大学学部に在籍する留学生の数は72,229人に達している。これは前年度に比べて4,757人増加しており、過去最高の数値となっている。

そして留学生数の増加に伴い、大学を卒業した後にそのまま就職して日本に残る留学生の数も増えている。図2は、日本学生支援機構の調査結果<sup>2)</sup>をもとに、大学卒業後に日本国内で就職した留学生の割合の推移をまとめたものである。

H23年度は、卒業後に日本で就職する留学

\* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

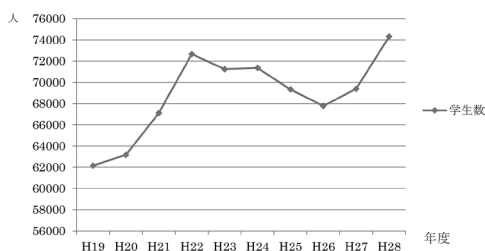


図1 外国人留学生数の推移（学部・短期大学・高等専門学校）

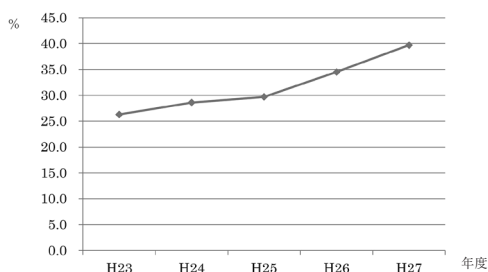


図2 大学卒業後に日本国内で就職した留学生の割合の推移

生の割合は26.3%（11,215人中2,952人）であった。それがH27年度には39.7%（11,722人中4,654人）に増加している。つまり、卒業後に日本に残って就職する留学生が増えていることがわかる。

大学卒業後に日本に残り日本の社会の中で働く留学生が増加しているということは、すなわち、留学生をスムーズに社会に送り出すために、大学が何らかの方策を講じる必要性が高くなっていることを意味する。そしてその方策を模索する上で、日本の大学に入学してから着実に日本語力を伸ばし、専門の学びを深め、卒業し就職に至った、いわば留学生の「成功事例」「モデルケース」を分析することには大きな意義がある。

そこで本稿では、ある留学生へのインタビューを通じ、その学生がどのように周囲の日本人との人的ネットワークを築き、その中でどのように学び、就職していったのか、その成功の要因はどこにあるのか、考察する。

## 2. 考察対象

今回考察したのは、以下の経歴を持つ元留学生Aさんの事例である。

### 【Aさんについて】

国籍および性別：ベトナム、女性

経歴：ベトナムの大学で日本語や日本社会について学び、卒業後、ベトナム国内の日系企業に6年間勤務。

2014年4月に来日し、茨城県内の大学の国際別科で1年間学んだ後、2015年4月に大学学部の3年次に編入学。在学中に日本語能力試験N2合格。2017年3月に卒業し、4月より日本の会社に勤務。

インタビューは2017年3月、約1時間半に渡って実施された。

## 3. Aさんの人的ネットワーク構築と学びへの影響

Aさんへのインタビューから、Aさんが来日後、周囲の日本人とどのように人的ネットワークを築いていったのかを探ったところ、主に次の4つの方法によるものであることが明らかになった。

- ①留学生親善大使
- ②アルバイト
- ③大学の海外研修
- ④授業での取り組み、SA、事務補助など

以下ではAさんがそれぞれの方法を通じてどのように人的ネットワークを構築し、何を学んでいったのかを見ていく。

### ①留学生親善大使

まず、Aさんの人間関係作りに一役買ったのは、「留学生親善大使」である。これは公益財団法人茨城県国際交流協会が県内の大学

生と県民との交流や相互理解を目的として実施しているもので、毎年20カ国以上100名前後の留学生が任命されている。県内の小学校等での交流（ワールドキャラバン国際理解教育講師等派遣事業）や、県内の公共施設および企業へのバスツアー（クエスト茨城）を行っている他、希望すればホームステイ（茨城ふるさとファミリー事業）にも参加することができる<sup>3)</sup>。

Aさんは来日した年にこの留学生親善大使に応募し任命された。そして大使として様々な義務的活動に参加しつつ、自ら希望してホームステイに参加した。このホームステイが、Aさんの人的ネットワーク構築に大きな役割を果たしている。

ホストファミリーとしてお世話になった日本人家庭の方々に対し、Aさんはホームステイ後もメールや電話、LINEで連絡を取り合った。特別なことがない時でも気軽に「お元気ですか」「ご家族はいかがですか」と近況を尋ね、内定獲得などの大きな出来事があればその都度連絡した。そして次第にホストファミリーと食事や誕生パーティー、プレゼント交換などを行うようになり、良好な人間関係を築き上げていったのである。

ホストファミリーとの個人的な人間関係が構築されるにつれ、Aさんが日本語を使う場面は増加し、それに伴ってAさんの日本語力も益々向上していった。また、お互いの信頼関係が深まる中で、Aさんが持つ日本や日本人に対する信頼感や好感度も高まり、それが日本語の学習や日本社会への理解に対する意欲に繋がっている。

## ②アルバイト

次にAさんの人的ネットワーク構築に大きな役割を果たしたのは、アルバイトである。Aさんは在学中、日本の社会人と接する機会はあまりなかったが、その中でもコンビニエンスストアでのアルバイトで出会ったあ

る女性とは現在でも友人関係が続いているという。

アルバイト生の中で唯一の外国人だったAさんに対し、この日本人女性は親切に接してくれた。当初は仕事に関する話を中心だったが、次第にAさんの母国ベトナムに関することや個人的な話題についても話すようになり、関係を深めていった。Aさんとこの女性が一緒に働いた期間は数ヶ月だけだったが、二人は今では姉妹のように仲が良く、頻繁に連絡を取り合っている。

Aさんとこの日本人女性が親しくなれた理由の一つに、この日本人女性にとってAさんが初めて出会ったベトナム人であったことが挙げられよう。これまであまり接点の無かったベトナム人であるAさんに対するこの女性の関心は高く、それが密接なコミュニケーションに繋がったと推察できる。

この女性から強い関心を示されたのに対応して、Aさんの方も、日常的なやり取りから自国の説明に至るまで、彼女に向けて自分から様々なことを発信しようとする意欲が高まった。もともと幅広い年齢層が利用するコンビニエンスストアで働くことによって日本語の会話や聴解の力を伸ばしていったAさんだったが、この女性との密なコミュニケーションを通じてさらに日本語力や自ら発信する力を高めていくことができたのである。

## ③大学の海外研修

大学で実施された海外研修への参加も、Aさんの人的ネットワーク作りに役立っていた。

Aさんの大学では様々な海外研修が実施されており、Aさんも4年生の時に台湾の大学での研修に参加した。23名の参加者のうち留学生はAさんだけで、他の日本人学生とともに台湾の学生に向けて日本語でプレゼンテーションを行ったり、中国語講座を受けるなどして、1週間を過ごした。

編入生であるAさんは、履修すべき授業の数が同級生に比べて多かったこともあり、普通の大学の授業では日本人学生とそれほど親しくなることはなかった。しかし海外研修では1週間寝食を共にしながら一緒に行動することにより、日本人学生との距離を縮めることができ、帰国後も良好な関係を保つようになった。

また、研修中、日本人学生とともに日本語によるプレゼンテーションを行ったことは、Aさんにとって大きな自信に繋がった。さらに、自分と同じように日本語を学んでいる台湾の学生の状況を自分の目で見たり、彼らと日本語を通じて交流したりすることで、大きな刺激を受け、日本語や日本文化についての学習意欲がさらに高まったという。

#### ④授業での取り組みやSA、事務補助など

Aさんは教職員に頼まれてSAや翻訳、通訳などの依頼を受けることが多かった。これは、Aさんが真面目な学生で人当たりがよく、教職員から高い信頼を得ていたことと大きな関係がある。

教職員の手伝いを通じて日本人の大人と接する機会が多かったことから、Aさんは年上の日本人への接し方や敬語の使用について実践的に学ぶことができた。さらに教職員から頼りにされる体験はAさんの自信や自己肯定感を育て、それが学習意欲や自律心へと繋がっていった。

## 4. Aさんの成功要因

3節でみてきたように、Aさんは様々な機会を通じて日本人との良好な人間関係を構築し、そこから多くの事柄を学んでいった。この状況から、Aさんの留学が成功し順調に卒業・就職に至った要因として、次の4点が考えられる。

### ①「量より質」の交流

Aさんは、実は日本人と接する機会を増やすために様々な事に手を広げていたわけではない。むしろ親善大使やアルバイト、授業としての海外研修など、身近なところにあった小さなきっかけや与えられたチャンスを最大限に活かしていたといえよう。そしてそこでの1つ1つの出会いを丁寧に育てることによって、相手からの信頼を得ていた。そしてその信頼が自己肯定感や自信に繋がり、勉強への意欲を生み出していたと思われる。

### ②同国人のいない環境の選択

Aさんは、アパートを決める際も、アルバイトを選ぶ際も、あえて同国人がいない環境を選んだという。海外研修に参加する際も、同国人の友達を誘うことはせず、自分一人で参加を決めていた。

留学生の中には、日本語によるコミュニケーションに不安を抱き常に同国人と一緒にいる学生が少なくない。Aさんも、普段は同国人の友人と行動を共にすることが多かった。しかし同国人がいない環境に身を置くチャンスが訪れると、Aさんはそちらをあえて選び、日本語を使わざるをえない状況を自ら作り出すことで、日本語の実践力を高めていった。そしてそれは本人の自信にもつながった。

### ③異文化受容の姿勢

Aさんに、ベトナムと日本との違いに戸惑ったことはないのか、と尋ねると、意外なことに「違いをあまり感じない」という答えが返ってきた。来日当初は言葉をはじめ様々な点で戸惑うことも多かったが、慣れてしまえば、食事にしても習慣にしてもあまり違いを気にすることはなかった、という。

これは、Aさんの持つ異文化受容力が非常に高かったことを意味している。異文化間の違いを特別に意識するのではなく、異文化

は異文化として受け入れる、あるいは自らの文化との共通点を見いだす能力に長けていたことがうかがえる。

この姿勢により、Aさんは日本社会において日本人と良好な関係を保ちつつ自分の居場所を見だし、落ち着いた状況の中で勉学に取り組むことができたと考えられる。

#### ④高い自己マネジメント能力

留学生の中には、夜間にアルバイトをすることで日中大学に来られなくなったり、学費や家賃の支払いが滞ったり、体調を崩す者が少なくない。

Aさんの場合、時間やお金、健康について常に気を配り、自己管理をしていた。それは本人の安定した生活に繋がるとともに、日本人からの信頼を得ることも繋がった。落ち着いて勉学に取り組める環境を自ら作り出すことができていたといえる。

### 5. 留学生のサポートに向けて

留学生が卒業後日本社会にうまく適応していくためには、周囲の日本人とよい人間関係、人的ネットワークを構築することが必要となる。今回の考察を踏まえると、大学に在籍中の留学生に対して、例えば次のような指導を行うことは、非常に有益であると考えられる。

#### ①既存の状況からのネットワーク拡大に向けた指導

多くの留学生は勉学とアルバイトに時間を費やし、忙しい毎日を送っている。彼らにとって、いくつものサークルに入ったりアルバイトを増やしたりすることによって自らの世界を広げ新しい人間関係を築くのは、容易ではない。そのため、「日本人の友達ができない」「日本語を使うチャンスが限られている」等は、多くの留学生が抱える共通の悩み

となっている。

そこで、そのような留学生に対して、既存の状況からでも人間関係を広げていくことが十分可能であることを説き、その方法を示すことが重要であると思われる。Aさんのように、親善大使や授業としての海外研修など、身近なところにあるチャンスを最大限に活かすことで自信を得たり日本語力を伸ばしたりした事例を紹介し、身近なところから人的ネットワークを作り上げていくことの重要性を示すことは、留学生にとって大いに役立つであろう。

#### ②異文化に対する寛容性の育成

Aさんの事例で明らかのように、異文化に対する受容度が高いと、自己を保ちつつ周囲とも良好な人間関係を築くことができる。

日本で暮らす留学生は多かれ少なかれ、日本と自国の文化や習慣の違いに常に直面している。だがその違いの受け止め方や対処の仕方は、個人に委ねられていることが多い。自らの経験をもとに異文化を理解することはもちろん意義深いことであるが、そこに理論的な裏付けが加われば、より深い理解が得られよう。

そのためには、異文化理解に関する授業を学生全員に義務づけ、異文化に対する寛容性を育成することが、日本人と留学生との良好な人間関係を構築する上でも大きな役割を果たすと思われる。

#### ③自己マネジメント能力向上のための指導

社会では特に、時間やお金の管理も含め、自己を確実にマネジメントできる人材が求められる。自己マネジメント力に長けている者は、周囲からの信頼も得られ、良好な人間関係を保つことができる。だがその能力は一朝一夕に身につくものではない。

そこで、時間や金銭の管理方法について実践的に学んだり先輩の体験談を聞いたりする

ことによって自己マネジメント能力を高められるようなプログラムを、入学時から大学側が留学生に持続的に提供すべきであろう。特に、若い留学生の中には、母国においても基本的な金銭感覚や生活能力を十分に身につけないまま、高校を卒業後すぐに来日する者も多い。そのような留学生は生活のリズムを崩し大学に来られなくなったりアルバイトで得たお金の管理ができず学費を払えなくなったりと問題を抱える危険性が高いため、早い時期から自己マネジメントの重要性を意識させる必要がある。

更に留学生の場合、時間や手続きに関する感覚の違いが日本人とのトラブルを招くこともあるため、日本的な考え方に対する理解を求めることも重要になってくるだろう。

日本で就職しようとする留学生にとって、日本語の能力はもちろん重要である。AさんもN2レベル以上の日本語力を身につけており、日常生活でのやりとりにはほぼ問題がなかった。しかし、日本語力が高いからといって、日本社会に適応できるわけではない。留学生が良好な人的ネットワークを築きながら自らの様々な能力を高め社会に出て行くことができるよう、大学は今後、日本語力の育成

ともに様々なサポートを試みる必要があるだろう。

### 【付記】

本稿は日本国際理解教育学会第27回研究大会（2017年6月3日、4日）での研究発表をもとに加筆・修正したものである。

### 【註】

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構（2016）
- 2) 独立行政法人日本学生支援機構（2017）
- 3) 公益財団法人茨城県国際交流協会 HP より

### 【参考文献】

- 独立行政法人日本学生支援機構（2016）『平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果』
- 独立行政法人日本学生支援機構（2017）『平成27年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果』

### 【参考ウェブサイト】

- 公益財団法人茨城県国際交流協会 HP  
(<http://www.ia-ibaraki.or.jp/kokusai/rikai/shinzen/index.html>)